

教育学者のあたふた子育て・親育ち(2)

母として保育者の専門性を考える(2)

佐久間亜紀

はじめに

はじめて出産し、母になりました。ところが、生後七か月を過ぎたころから、娘が原因不明の嘔吐と下痢を定期的に繰り返すようになりました。前回は、母子共に憔悴しきって医師に助けを求めたのに、逆に、医師の態度に深く傷ついてしまった経緯を記しました。

捨てる神あれば拾う神あり

さて、その後、私たちを救ってくれたのは、別の小

児科医でした。

この先生は、幾つか質問を私に投げかけながら、四か月間の娘の様子を語る私の話にしつかりと耳を傾けてくださいました。どうやら問題は、隣の布団まで飛んでいくような噴水状の嘔吐があるということのようでした。「内科の僕には原因がわからないから、何か器質的な問題があるかもしれないね。県立病院の小児外科に紹介状を書きましょう。また、様子を知らせてね」とのことでした。

この日の受診では嘔吐の原因はわかりませんでした

が、私ははつきりと、ああこれで私は一人じゃない、救われたんだと感じていました。

クライアントに向き合つていく

いま考えれば、私が救われたと感じられたのは、この医師の姿勢に、二つの点で対人専門職としての専門性がしつかりと示されていたからだと思います。

一つは、この医師が、患者（母親）の話をじっくり聴こうという姿勢を明確に示していたことです。たくさんのお患者を待合室で待たせながら、母親の話を最後まで聴くのは、容易ではなかったはず。もう一つは、この医師がただ話を聴くだけでなく、「一緒に考えよう」という姿勢を示して、具体的な援助行動を展開していたことです。

前回記したように、英語で「責任をもつ」「信頼できる」という意味をもつ「レスポンシブル (responsible)」という単語は、同時に「返事をする」「応答する」という意味も含んでいます。つまり、クライアントの話に

しつかりと耳を傾け、きちんと応答することが、専門家として責任ある行動をとるという内実に含まれているのです。

上の医師は、「自分には原因はわからない」とはつきりと伝えたくて、紹介状を書くかたちで私たちにしつかりと応答してくれました。そして、紹介しておしまいではなく「また様子を知らせてね」という一言を忘れませんでした。娘の先行きに関する不安そのものはなくなりませんが、私は「共に歩もうと思つていきますよ」という医師からのメッセージを受けることで、救われたと感じられたのだと思います。

保育や教育の現場では、子どもの異変や問題行動の原因を、これだと断定して示せないことが多いです。しかし、たとえ問題の原因がはつきりとはわからないままだったとしても、教師や保育者から「一緒に考えましょう」「共に歩いていきましょう」という姿勢が示されれば、当事者は不安になることなく、むしろ支えられたと感じることを、私は学びました。

ナゾが解けた

さて、娘はその後、大きな県立病院の小児外科で幾つか辛い検査を受けて、ようやく原因不明の嘔吐と下痢が続いた理由がわかりました。娘の胃が、大きくねじれていたのです。胃軸捻転症との診断でした。

胃はふつう靱帯じたいや腹膜しふまくなどによって位置が固定されているのですが、赤ちゃんの十人に一人はその靱帯が未発達なため、胃がねじれてしまい、噴水状に吐いたりするのでそうです。昔「疳ぐんの虫」と呼ばれた「虫」は、「いま風に言えば胃軸捻転のことだよ」とのことでした。多くは月齢二、三か月ごろには自然に治るのだそうですが、娘の場合は一歳近くになってもまだねじれたままで嘔吐しやすく、しかもウイルス性胃腸炎による嘔吐や下痢も混じっていたので、わかりにくかったということのようでした。「二歳くらいまでには自然に治るから経過を見ましよう、それでも治らなかったら手術しよう」と言われました。

たらい回しの現実

胃軸捻転が判明してまもない四月、私は職場復帰し、娘は保育園に入りました。その春は、私にとっても文字通り希望の春でした。娘は胃がねじれているため食が細く、しかも嘔吐下痢症を繰り返していたため、離乳食がなかなか進みませんでした。園の先生方なら、どうしたらいいか、相談にのってくださいるだろうと期待していたのです。

しかし娘が入園すると、逆に「給食はどうしたらいいですか？ おかゆは何グラムにしますか？ おかずは？」と尋ねられました。「グ、グラム？」

困り果てて主治医に尋ねると、「胃軸捻転の赤ちゃんはたくさんいるから、食事のことは僕らより保育士さんのほうが詳しいよ」と言われます。そこで保育園で再び尋ねると、「医学的なことはわかりませんが、私たちはお母さんからの指示通りにします」と言われます。でも私としても、月齢に応じた必要量や消化しや

すい食材の栄養バランスなど、わからないことだらけで、指示を出したくても出せません。仕方なく再び医師に相談すると、病院の管理栄養士に回されて、離乳食の本のコピーを渡されただけでした。

どの「専門家」も、誰一人として「どうしたらいいか、一緒に考えましょう」という姿勢を示してくれず、本当に途方にくれたのを覚えています。

保育者の専門性

娘の担任の先生にしてみれば、給食は命にかかわることですし、娘の状況を一番よく知っている母親から情報を得て、娘の体調に適した給食を準備しようとしてくださったのだらうと思います。後になって少しづつわかったことですが、娘の担任の先生は、ほかの保育士からも頼りにされる程、責任感の強いしつかりした先生でした。いまでは私たちも頼りにしています。

ただ、この時の私は、なかなか食べてくれない娘と毎日毎日向き合いながら、しかもいつまた嘔吐するか

と不安でいっぱいの状態でした。そんな私が第一に必要なとしていたのは、きつと「何グラム」の給食が娘にもっとも適切かという「答え」よりも、「お母さんにもわからないんですね。じゃあ、どうしましょうか」と、その答えを導くためのプロセスを一緒に歩んでくれる人だったのだらうと、いまになって思います。

「一緒に考えましょう」という姿勢をもち、しかもそれをクライアントに伝えることは、簡単そうदैて、実はとても難しいことなのですね。だからこそ、これこそが対人専門職の専門性の、大切な要素の一つだらうと思うのです。

助けを求めることこそが難しい

以上のように、母になってつくづく思うのは、そもそも助けを必要とする人が、必要な助けを得るのは本当に難しい、ということです。

私の場合も、住んでいる地域には市役所や助産師会、病院やNPOなどが、それぞれの「子育て相談窓口」

をたくさん開設してくれています。それはそれで心強いのですが、私のように、いざ「娘が二度と吐かないようにするにはどうしたらいいの？」と切羽詰まった時、どの専門家にどう相談したらよいか、わかりませんでした。そして、必死に助けを求めては傷つけられることの繰り返しの中で、もうこれ以上傷つきたくないと強く思いました。助けを求めては傷つけられることが続けば、「助けてー」と言うこと自体をあきらめてしまうのです。

三つのハードル

途方にくれた時に必要な助けを得るためには、大きく三つのハードルがあります。

まず第一に、こちらがどんな助けを必要としているのかを自分で伝えなければなりません。でも、本当に助けが必要な時というのは、自分にどんな助けが必要かが、わからない時なのです。

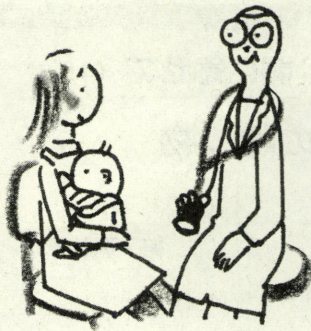
しかも第二に、誰に「助けて」というのが適切か、

自分で判断しなければなりません。魚屋に行つて肉をくれといつてもダメなように、間違つた窓口に行つて助けを求めても、適当にたらい回しにされて疲れるだけです。でも誰に頼ればいいのかわからないからこそ、途方にくれているのです。

さらに第三に、適切な窓口に行けたとしても、その専門家が「なるほど、この人は助けてあげなくちゃ」と感じてくれるように話せなければなりません。でも多くの場合、必死で助けを求めても「何を言っているのかわからない」「心配しすぎ」などと判断されて、とりあつてもらえません。

何をどう説明していいかわからない

後でわかったことですが、たとえば前回記した「小児科医に発症からの経緯を書いて渡したのに、突き返された紙」には、医師が必要とする情報はほとんど書かれていなかったというのです。私はその紙に、娘が何月何日の何時ごろに嘔吐し、何度ぐらいの発熱で、下



痢便の色が何色で、といった情報を時系列に書いていたのですが、別の医師に「この場合、診断にはそんな情報は不要だよ」と教えられて衝撃を受けました。医師にとって重要なのは、口から下に垂れてゆく吐き方なのか、噴水状にふき出す吐き方なのかといった、吐き方の描写だったというのです。でも、どんな情報を提供すれば医師が目にとめてくれるかなんて、素人の親にわかるはずがありません。だから結局、私としては、「要点を的確に話せる母親」のつもりが、医師にとっては「ぐだぐだど意味のないことを書いてきた母親」になっていたのです。

もしも、保育や教育の現場で、何を言っているかわからない保護者や、

話が長いのに肝心なことが何もわからない保護者などに会った時は、「ああ、この方は何をどう話したらいいかわからないんだな」と受け止めて、助け船を出してあげてください。親としては、一生懸命話しているつもりなのです。

ともしびとしての保育者

子育ての一番の難敵は、「不安」なのではないでしょうか。そうした親の不安に真っ先に応え、「一緒に考えましょう」という姿勢を示せるのは、間違いなく、毎日子どもと生活して、いわば、子育てのパートナーとなったださる保育者や教師です。

先の見通せない明日への不安をつのらせる親にとっては、保育者の存在は明日へのともしびです。社会全体が不安定さを増している中で、親子の傍らにたえずみ足元を照らしてくれる保育者の存在は、ますます重要になっているのではないでしょうか。

(上越教育大学准教授)